

東京教区 礼拝音楽 NEWS

第5号

2021年8月31日

編集・発行／日本聖公会東京教区 礼拝音楽委員会

reihaiongaku.tko@nssk.org

昨年からの状況は、多様なそれぞれの教会が、何を大切にすべきか真剣に考える時ともなりました。今号は、その表れのひとつ「礼拝の配信」アンケートを分かち合います。また「聖歌」「声」にも目を向けます。

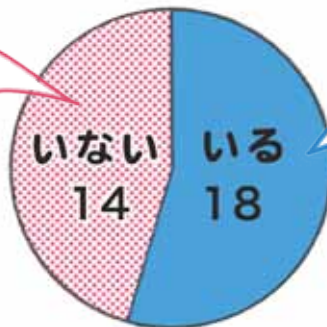
さまざまな取り組み — 「オンライン活用状況」アンケート報告

コロナ禍も1年を越え、「礼拝の配信」についての話題が増えてきました。そこで礼拝音楽委員会ではアンケート調査をしてみました。今だから出来ること、今だから大事にしたいこと…。どの教会の試行錯誤にも、思いが詰まっていました。

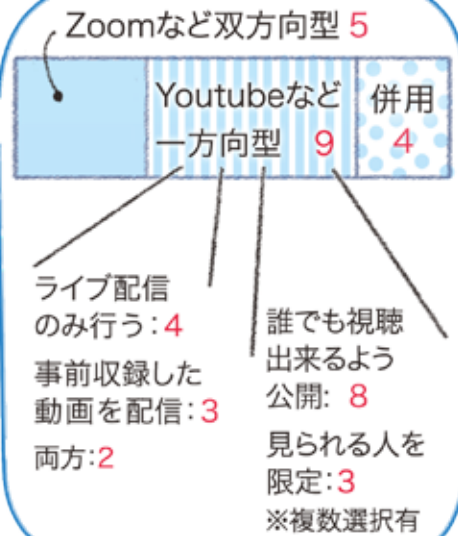
なぜ？

- 主教座聖堂の礼拝があるので：9
- 送り手・受け手または双方のネット環境が整わないため：5
- ネット環境のない人への配慮・公平性：1

インターネットを用いた礼拝を教会独自で行っていますか？



どうやって？



Zoom など

双方向型を使う理由は.....

- 参加者同士の交流（顔が見えるだけでよい）がそれなりに担保できる。
- 安心を確保できる最善の礼拝方法だと考える。皆さんが自力、またはご家族の協力を得てネット環境を整えてくれ、導入が容易だったという背景も。

Youtube など一方向配信型は

- 視聴可能性が高いと考え使用している
- 当初は Zoom、次に Zoom が利用できない方に配慮して Youtube のみにしたが、双方向の交わりも大切だと考え、Zoom を再開。現状は主日の 10 時半が Youtube 配信、12 時に Zoom で主日昼の「主の祈り」を行っている。

・2021年6月実施。
 ・対象 東京教区内の教会・礼拝堂。
 ・方法 アンケートを教役者にお送りし、必要であれば配信担当者に転送していただきました。
 ※ここに掲載できる結果は一部ですが、教役者には全体の報告をメールでお送りします。詳細は教役者にお尋ねください。また、移り変わる状況とともに教会の対応も変わると考えられます。上記の時点での回答であることをご了承ください。

公開配信？ 限定配信？ (Youtube など一方向型で)

公開

・どなたでも（予約など不要で）つながることができる、ということを最優先に、完全公開とした

非公開

・代祷など個人名への配慮から（編集版は後で公開）

ライブ配信？ 事前収録？

ライブ

・主日を迎える喜びをリアルタイムで共有したい

収録

・いつでも視聴して、ご一緒にお祈りできるように
・通信状況の不具合や、収録中の不測の事態発生を危険を回避するため

配信される礼拝の中での音楽は

- ・ 奏楽奉仕あり
- ・ 録音音源を利用
- ・ ヒムプレイヤーで歌う
- ・ チャントのみ歌う
- ・ 音楽なし

⇒ 10 教会が聖歌を導入、用い方はさまざま。

個人が自宅などで歌った音声を Mix、バーチャルクワイアの音源 & 動画を作成してライブ配信に挿入（千住）

教役者のみの礼拝は無伴奏で歌唱、公祷では奏楽と聖歌隊による歌唱（立教諸聖徒）

聖歌隊奉唱がないため、毎回オルガンとバイオリン演奏をしたところ、感銘した人から聖歌隊参加の申し出があった（聖オルバン）

取り組みでの苦勞、工夫は？

- ・ 提供側のノウハウ、技術不足（ネットワーク 動画編集、音響設備等）
- ・ 視聴側の利用ノウハウサポート（PC、スマートフォン操作、アプリケーション利用方法等）
- ・ 安定したネットワーク環境の維持
- ・ 礼拝の方法に対する奉仕者、信徒の意見調整
- ・ 画質、音の確保
- ・ 人材不足
- ・ 個人情報保護、セキュリティ対応
- ・ 対面礼拝のような公平性の維持
- ・ 機材等導入費用、管理者の依頼と費用

普段から“集まっている方”を中心として教会が回っていることを痛感。集まることができない方に対するアプローチを、もっと柔軟に考え工夫する必要を感じる（葛飾）

教会への献金は、QRコードまたはクレジットカードで集めている（聖オルバン）

オンラインでどんな礼拝を？

※複数回答あり

聖餐式	11
み言葉の礼拝	9
朝夕の礼拝	5
日曜学校	4
葬儀（希望時のみ）	1
その他	4

子ども向けのお話、正午の祈り、教会独自の形式も

礼拝以外のオンライン活用は？

- ・ 教会委員会
- ・ 聖書等の学び会
- ・ 教会グループ協議会
- ・ 聖歌を歌う会、聖歌隊活動
- ・ 洗礼準備 ・ コンサート
- ・ Youtube、SNS、ブログでの発信（説教、ニュース等）
- ・ 近隣の子ども向け音楽教室
- ・ 外国人向け日本語教室
- ・ Skype で信徒同士の交流 ほか

インターネット利用が難しい人への情報発信、配慮

- ・ 週報、牧師メッセージ、教区ニュース等の郵送または FAX 送付、メール送信、電話連絡（毎週 / 2 週に 1 回 / 月に 1 回 / 月に 1 回 など）
- ・ 島ではほぼ全員に直接会いに行くことができるので、お声がけをして必要な方には短時間で屋外でお会いしたりしている（聖ジョージ）
- ・ 礼拝で歌う「今月の聖歌」譜面をお送りし、それぞれの場所でも共に歌って過ごすよう呼びかけ。信徒間のコミュニケーションを進める「お手紙プロジェクト」としてハガキを作成、配布した（聖テモテ）
- ・ 「主日の黙想（司祭ショートメッセージ冊子）を作成し郵送（聖マリア）
- ・ 大勢の患者さんが一度に集まらない時間帯を考慮し、平日朝の礼拝、主日早朝聖餐式などを実施（聖ルカ）

※このアンケートはあくまでも、現状調査および工夫・悩み・思い、等々の共有のためであり、オンラインによる礼拝の是非を問うものではありません。

調べによって詩情が変わる愉しみ—英国と米国の聖歌を見比べて

司祭 宮崎 光（礼拝音楽委員）

「共に集って聖歌を歌う」礼拝生活から離れて久しい気がします。「声を合わせて歌う喜び」に代わるものではありませんが、「歌えない今」、これまで歌ってきた聖歌を、静かに深く味わう絶好の機会といたしましょう。

日本聖公会が組織成立する約130年前（1887年）、その時代の英国と米国の聖歌の動きから思いめぐらします。英米両国の宣教師たちは、母国で歌ってきた最新の聖歌を携えて日本伝道を展開しました。そこには「同じ詩で違う曲」の聖歌がありました。聖歌は、一つの詩に何種類もの曲と組み合わせられるものですが、特に英国と米国では、親しまれる曲の感じが異なる印象があります。『聖歌集』に収められた「同じ詩で違う曲」の聖歌から、調べ（曲）によって詩情（詩の世界）がどのように変わるか、愉しみ、味わってみましょう。

85, 86 番「ああベツレヘムよ」

O little town of Bethlehem（1868年）

米国聖公会司祭フィリップス・ブルックス（後に主教）が、聖地巡礼の経験から1868年12月に「クリスマス礼拝で日曜



学校の子どもたちに歌わせたい」と作詞し、彼の司牧するフィラデルフィアの教会のオーガニスト、ルイス・H・レドナーに作曲を急遽依頼して生まれた聖歌です（85番、曲名「ST. LOUIS」）。米国聖公会の日曜学校聖歌集 *The Church Porch, 1874* に収められて以降、広く知られるものとなりました。今や、クリスマスシーズンの街角に流れる、スタンダード・ナンバーの一つでしょう。ところが、1896年 *The Treasury of American Sacred Song*（『アメリカ聖歌の宝』、W. G. Horder 編）という米国発祥の聖歌を収めた歌集で英国に紹介されたこの詩は、1906年の聖歌集 *The English Hymnal* 以来、違う曲「FOREST GREEN」で親しまれることとなります（86番）。この曲は、同聖歌集編集に携わっていた R. ヴォーンウィリアムズが、1903年冬にフォレスト・グリーン村のガーマン氏が口ずさんでいた旋律

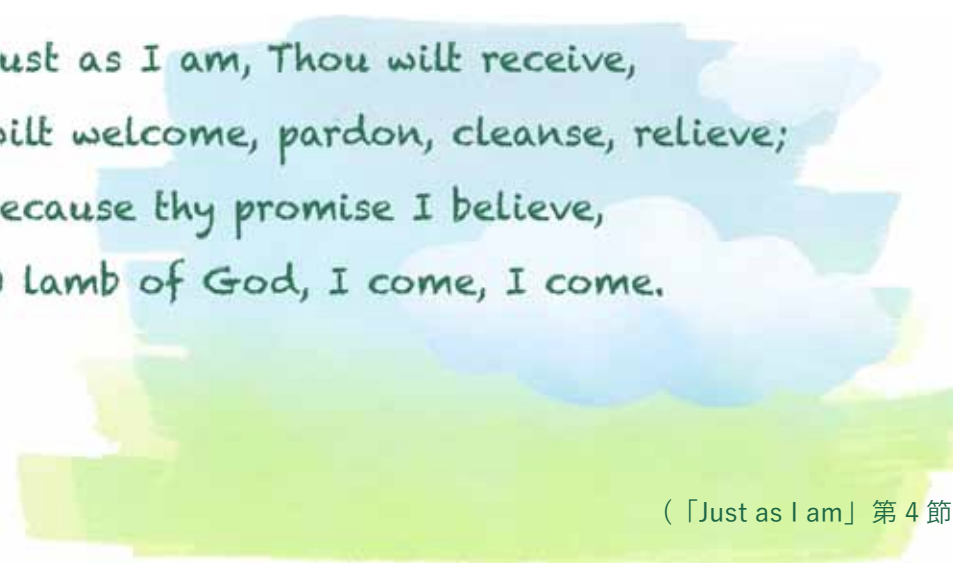
を採譜し、聖歌用に編曲したもので、英国民謡と伝えられます。

ST. LOUIS（85番）には、「古き良きアメリカ」のホームドラマのような情景、静かな聖夜と暖かな部屋を感じます。FOREST GREEN（86番）には、イングランドの凍れる田園風景や歴史劇のような情景を感じます。あなたは、どのような情景を描きますか？

83, 84 番「人にはみ恵み」

It came upon the midnight clear（1849年）

「ああベツレヘムよ」よりも20年ほど前、1849年の暮れに米国ユニテリアン派の牧師エドモント・シアーズが *The Christian Register* 誌に発表したこの詩は、1850年にリチャード・S・ウィリスが作曲した CAROL（83番）との組み合わせで親しまれています。これも先述の歌集『アメリカ聖歌の宝』によって英国に紹介



Just as I am, Thou wilt receive,
wilt welcome, pardon, cleanse, relieve;
because thy promise I believe,
O Lamb of God, I come, I come.

(「Just as I am」第4節)

されると、異なる曲 NOEL (84 番) で広まります。

米国で生まれた、8 分の 6 拍子で、夜空に大きな弧を描く天使の賛美を思わせる調べ CAROL (83 番) は、英国では、4 分の 4 拍子で、神の恵みが降り注いでいる確信を歌わせるような調べ NOEL (84 番) によって親しまれています。わたしたちは、時に応じて歌い分けるのも良さそうです。

445, 446 番 「いさおなきわれを」

Just as I am, without one plea (1838 年)

英国で生まれた詩が、米国ではどのような旋律で親しまれたかを見ましょう。445 番「いさおなきわれを」の曲「ST. CRISPIN」は、この詩のために 1862 年に作曲されました。作曲者ジョージ・J・エルヴィは、ウィンザー聖ジョージ礼拝堂のオーガニストでした。華美になり過ぎない、抑制した和声は旋律に深い情緒を与え、英国聖公会らしい謙遜と信頼を醸し出しているようです。

米国ではこの詩は、446 番の曲「WOODWORTH」で愛唱されてきました。もと

は葬儀の詩のために作曲されたのですが(1849 年)、作曲者ウィリアム・B・ブラッドベリが自ら編集した 1860 年の歌集 *The Eclectic Tune Book* で、この詩と組み合わせられました。

米国聖歌曲のテイストに、「アメリカ音楽の父」と呼ばれる S・フォスターを思いました。「おおスザンナ」(1848 年)、「ケンタッキーの我が家」(1853 年)、「夢路より」(1862 年) など、フォスターの音楽は当時のトレンドであり、フロンティア精神と家族愛が染み渡ってゆくような歌の世界観は、聖歌の曲にも大きく影響したと想像できます。

かくして、日本聖公会最初の『古今聖歌集』(1902 年版)の編集作業開始の頃(1896 年)は、まさに米国と英国の音楽の最新トレンドを、無理なく掛け合わせて提供できる状況が整えられていたのです。そして、わたしたちは約 120 年間、それらの聖歌を受け入れ、歌い継いできました。それを大切にしつつも、やはり「温故知新」の姿勢へ常に拓かれているようにと、この歴史は呼び覚ましているということも、今、強く受け止めたいと思います。

リモートで行う「聖歌をうたう会」

聖パウロ教会では月に2回、聖歌をうたう会を開いていましたが、新型コロナウイルス感染症の流行によって教会での集会はすべて休止になってしまいました。また、緊急事態宣言が解除されたときに対面で行う礼拝も、聖歌は心の中で歌うということになり、最近は大きな声でみんなで聖歌を歌う機会がなくなってしまいました。

感染の勢いはなかなか止まらず、集会再開のめどが立たない状況が続くと、教会委員会などの会議や講座はインターネットを利用したオンライン会議システムを利用しはじめました。

オンラインの会議システムには「時間のズレが生じる」という特徴があります。時間のズレはシステムだけの問題ではなく、参加者の利用する端末、インターネットの回線状況などによっても生じるため、その「ズレ」はみんなで声をそろえて歌うときには大きな壁となって立ちはだかります。

会議や講座が次々とリモートで再開されるのを横目でみながら、みんなで聖歌を歌うことはあきらめて、嵐が過ぎ去るのをひたすら待つしかないと思っていたとき、一人の信徒さんから「図書館で文部省唱歌のCDを借り、家でCDをかけて一緒に歌ったら楽しかった」というお話をうかがいました。また、動画配信されている礼拝に自宅で参加している方から、「聖歌のとき、アルトパートと一緒に歌うとデュエットしている気になって楽しかった」というお話もうかがいました。

それならリモートでもできるかも……。

そこから思考を重ね「参加者は全員ミュート、教会から発信される歌と伴奏を聞きながら参加者がそれぞれ歌う」という方法にたどりつきました。しかし、この方法では他の参加者の声は聞けないし、なんといっても一人カラオケみたいなものですから「それは楽しいのだろうか？」という懸念もありましたので数人でテストを試してみたところ、意外にも「楽しい」という感想をいただきましたので、正式に聖歌をうたう会をリモートで行うことにしました。

うたう会では、聖歌を1曲歌い終わるたびに全員ミュートを外しておしゃべりタイムがあります。聖歌との出会いや思い出、音楽豆知識などを分かち合うひとときは時間がたつのも忘れそうです。

私たちは、聖歌を歌うことにすこし飢えているかもしれません。だから隣人の声に合わせて歌うことができなくても、心を合わせて歌うという小さなことに喜びや楽しさを感じるのかなあと思います。けれど、この試みは暫定的なものです。みんなでマスクをはずして大きな声で聖歌を歌える日が再び来ることを祈ります。そのときの歌声は、どんなふうに私たちの耳に、心に響くでしょうか。



また歌う日に備える

ボカール・ヘルス・エクササイズ

英国王立教会音楽学校ウェブサイトより

<https://www.rscm.org.uk/online-resources/singing-for-health/>

みんなで思い切り歌うことができない日々が続く、声や身体は、以前とは少し変わってしまっているかもしれません。簡単な体操をご紹介します。

①でたらめハミング—飛沫を飛ばさないで出来る発声練習、健康増進効果も！
音程なんて気にしない！入浴中、散歩中、家事をしながら、声を自由に使う感覚を味わって。



- ・ 顔の筋肉をリラックスさせ、唇をほんのわずかに開けます。
- ・ 舌も力を抜いたまま、下の前歯のすぐ後ろにつけます。
- ・ 唇や舌、顎をできるだけ動かさずに「Singing」というようにハミング。
口の中でシーンギーーン、って感じ。
- ・ 声を無理に押し出さないこと。軽く、優しくハミングすることで喉そして気持ちがほぐれ、整っていくでしょう。

②呼吸体操—喘息の人にもおすすめ



- ・ 肩の力を抜いて自然に立ち、ゆっくり深く息を吸います。おへその後ろあたりに空気を入れていくイメージ。
- ・ 口を「シュ (Sh)」と言うときの形にしてゆっくり優しく息を吐きます。2～3秒したら（息を吸わないでそのまま）口を「ヴ (V)」と言うときの形にします。だんだん早くしながら何回か繰り返して吐き切ります。
- ・ こんどは深く息を吸いながら、つま先立ち&手を前方に「おばけ」の形に垂らして数秒間キープ。ふわりと浮き上がるイメージを描きましょう。
- ・ 「シューーツ！」と息を吐き出しながら、かかとと手を下ろします。

体の力を抜くことを常に心がけて。他の人がいる場所では十分に換気し、距離をとって行いましょう。（転載許諾済／イラスト&翻訳：中島郁代）

『礼拝音楽 News』バックナンバーは

インターネットでご覧になれます

右のQRコードを読み取っていただくか、東京教区ホームページ <http://www.nskk.org.tokyo/> から『礼拝音楽 News』の紫のバナーをクリックしていただくと、各号のPDFファイルへのリンクが表示されます。また、2020年クリスマスに大阪教区礼拝・音楽委員会と合同で製作・公開した動画「音の出るクリスマスカード」のリンクもこちらにございます。

